南アフリカ共和国の酒風土（１）

現在のところ、お酒に関しては、まだ馴染みのうすい南アフリカ共和国であるが、実はワイン及びビール等の世界的な生産地である。そこで、地理学の専門家である著者に、その酒と風土について２回に分けて紹介していただいた。第１回目は、ワインについての解説である。

寺 谷 亮 司

I. は じ め に

酒は、風土の産物である。風土という言葉は、狭義には、風は気候条件、土は地形の起伏や土壌などの土地条件を指すので、いわゆる土地の自然環境である。世界に分布する多様な酒類は、その地域の産物としての穀物、果実、糖類、乳類などを主原料とし、発酵環境やスターターの存在など、自然条件に大きく依存している。風土はまた、広義には、自然と人間生活との一体としての土地柄を意味し、歴史や文化など人文環境を含意する。世界には、多くの民族が住み、その多くが固有な飲食文化をもち、伝統酒を有している。また、南アフリカ共和国の例でいえば、ワイン文化を持ち込んだのはオランダ人であり、現在の酒類分布における人文環境の影響は少なくない。

南アフリカ共和国といえば、1994年5月のマンデ

ラ政権の誕生はまだ記憶に新しいところであり、白人と非白人の政治的対立や人権侵害はつとに有名であろう。現在の人種構成をみると、約4,000万人の国民のうち、黒人が3,000万人、白人500万人、カラードと呼ばれる混血が350万人、インド人がほとんどを占めるアジア人が100万人ほどである（第1表）。アパルトヘイト諸法は、その多くが1991年に廃止されたが、民族間の社会・経済格差は依然として大きい。都市内の居住地域は現在でも民族別に分化している。

一方、この国がワイン、ビールなど酒類の傑出した生産地であること、また国民の多数を占める黒人の伝統酒である雑穀酒（Sorghum Beer）や北東部沿岸地域特産のヤシ酒（Palm Wine）など、酒風土についての情報は少なく、とりわけ日本ではほとんど知られていないように思われる。筆者は、1994年の3月から4月にかけて当国を訪れ、酒事情を調査する機会を

第1表 南アフリカ共和国の人種別社会経済指標

	人 口 (1993)	人口比率 (%)	人口増加 率 (%)	平均寿命 (歳)	乳児死亡 率 (人)	1人当り 床面積 (m ²)	1人当り 教育予算 (兰特)	職 種 (%)		世帯所得 (月, 兰特)
			(1986-91) 年平均	(1987)	1980-85 年平均	1991	1991/92	上級者 管理職 1992	工場 労働者 1992	1987-92 平均
アフリカ人	31,088,600	76	2.1	63	82.0	8.9	1,248	1.1	59.0	912
白 人	5,134,229	13	0.8	73	13.0	33.2	4,448	98.2	0.6	5,163
カラード	3,480,052	9	1.9	63	56.0	12.0	2,701	0.3	23.1	1,793
アジア人	1,012,823	2	1.9	67	18.9	18.2	N/A	0.5	17.3	2,880
合 計	40,715,704	100	1.9					100.0	100.0	

(出典：小倉 (1995))

Liquor and Liquor Industry in South Africa (Part 1)
Ryoji TERAYA (Ehime University)

得たので、以下、その酒風土を紹介したい。

II. ワイン

1. ケープワイン

南アフリカ共和国のワイン生産量は、96.3万kℓ(1991年)で、世界第8位の地位にある。ただし、この数量はアフリカ全体のワイン生産量の約9割を占め、日本の生産量(5.5万kℓ)と比べても過大であり、またその生産地域がケープタウン周辺のごく狭い地域に限定されることを考え併せると、ケープタウン産地は世界屈指の生産地域である。

ブドウ栽培地は、温暖で、適度の雨量で乾燥しており、日照時間が長いことが望ましい。とりわけ、花が開く初夏から実が成熟する秋の少雨と日照時間が重要とされ、夏季が乾燥、冬季が雨期となる地中海性気候が最適となる。南アフリカ共和国各都市の気候データをみると、ケープタウンのみ降水量パターンが異なり、5月から8月の冬季に雨の多い地中海性気候となっている。ケープタウンの平均気温は、年平均16.3℃、最寒月の7月でも11.9℃と、年間を通じて極めて温暖かつ快適な気候であり、この点は、筆者の住む松山市の平均気温と比較すると、より明確である(第2表)。このように、南アフリカ共和国のワインは、すなわちケープタウン周辺のケープワインであり、ケープワインはまさに風土のお酒である。

2. ワイン産業概史

南アフリカ共和国のワイン産業関連史年表が、第3表に示される。ケープワインは、1659年オランダ東インド会社のリーベック隊長によって創始され、第2代総督のヴァン・デア・スティルは、後年産地の中心となるストレンボシュやコンスタンシアの農場を開設した。その後、フランスのユグノー移民、さらにはイギリス植民地時代の保護政策などによって発展するなど、ケープワインの歴史は南アフリカ共和国の開拓史

と極めて密接である。20世紀になると、ワインの生産過剰傾向が強まり、この対策として1918年に設立されたのが、現在でもケープワインを管理・総括する巨大組織の「南アフリカワイン醸造業者協同連盟」(正式名称 Ko-operative Wijnb-ouwers Vereniging van Zuid-Afrika Beperkt)であり、通称 KWV と略記される。第二次世界大戦は、製造施設の近代化および大型化、流通組織の再編が顕著となっている。

3. ワイン産地の概況

南アフリカ共和国のワイン産地は、1973年に制定された「ワイン原産地呼称制度(the Wine of Origin Legislation)」により、5地方(Region)、10地域(District)、35地区(Ward)に区分される(第1・2図)。

このうち、沿岸のコースタル・リージョン(Coastal Region)地方は、コンスタンシア(Constantia)地区、パール(Paarl)・ストレンボシュ(Stellenbosch)地域など、最も名高いケープワイン産地を含んでいる。当該地域は、内陸山地に囲まれ、内陸からの暑気が阻まれ、大西洋からの涼風による適度な降水量によって、上質のブドウが栽培され、その結果良質のワインが造られる。

これに対して、他の内陸産地は、気候が高温・乾燥であり、通常は灌漑施設を必要とする。灌漑施設が整えば、ブドウに適した石灰岩質土壌と相まって、糖度の高い上質ブドウがとれるが、良質ワインに欠かせない風味に乏しいうらみがある。このため、ワインの多くは、ポート、シェリーなどの酒精強化ワイン(Fortified Wine)または蒸留用ワインとなっている。ただし、最近では、優良な天然ワインも増えてきた。

4. 原産地呼称制度

ケープワインには、独自の「ワイン原産地呼称制度」がある。その第一の特徴は、ラベル表記におけるブドウ品種の重視であり、しばしば原産地やワイン製

第2表 ケープタウンと松山の月平均気温と降水量(上段℃, 下段mm)

地 点	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	全年
ケープタウン 33° 58' S	20.4 15	20.4 16	19.2 21	16.9 41	14.4 68	12.6 93	11.9 82	12.4 77	13.7 38	15.7 33	18.0 16	19.5 19	16.3 519
松山 33° 50' N	5.3 51	5.6 59	8.6 87	14.1 123	18.3 130	22.0 233	26.4 149	27.2 99	23.5 152	17.9 99	12.7 66	7.7 39	15.8 1286

(資料:理科年表)

第1図 南アフリカのワイン産地 (出典: Huges et al. (1992))

法よりも優先される。すなわち、複数のブドウ品種によるブレンドワインの場合は、その構成比の多い順に品種名が記載される。ただし、他のブレンド品種の構成比率合計が25%未満のブレンドワインでは、単一品種表示で良い。第3図として、南アフリカ共和国のワインラベルの一例を示したが、ブドウ品種のほか、生産者名、原産地、収穫年度、アルコール度数、ボトル容量、味の甘辛度などが表記される。

第二の特徴は、「原産保証シール」(The Wine of Origin Seal) の存在である。ボトルの首の部分に貼られる当該シールは、ワインラベルとともに、当該ワインの身元や品質が表記され、消費者への貴重な商品情報となる。シール全体の色(青, 金), 帯色(青, 赤, 緑) などによって示される保証内容は下記の通りであ

る(第4図)。

①青帯 (Blue Band) — 原産地 (Origin) : 表示原産地域, 地方, 地区の生産ワイン 100%であることを保証する。

②赤帯 (Red Band) — 収穫年度 (Vintage) : 表示収穫年度産のワインを 75%以上使用していることを保証する。

③緑帯 (Green Band) — ブドウ品種 (Cultivar) : 表示ブドウ品種によるワインを 75%以上使用していることを保証する。

④Estate 表示 : 上記帯の直上または直下に, 黒文字で表記され, 後述するエステートワインであることを保証する。

⑤金色シール (Gold Seal) — 優良 (Suprior) ワイ

第2図 ケープワイン産地地図

(ただし、①②③④⑤⑥⑦⑧⑨⑩⑪の産地名は第1図参照。資料：Johnson (1985))

第3図 南アフリカ共和国のワインラベルの一例

(A：収穫年度，B：エステートなど生産者名，C：ブドウ品種名，D：産地名)

ン：ワインの身元が明確で，品質がとりわけ優良なワインであることを保証する。

⑥身元証明番号 (Identification Number)：シール中央に縦書きの番号で表示される。

ただし、「Suprior」の品質表記に関しては，7人の審査員団による評価の客観性への疑義，何百銘柄も指定されることによる称号の希少性の欠如から，制度の見直しが叫ばれ，1989年にまず金色シールが廃止された。そして，1992年度産ワインからは，色帯表示による原産地，収穫年度，ブドウ品種表記も廃止となった。現在の「原産地保証シール」は，第4図に示されるように，身元証明番号のみが表示され，シンプルかつ灰色で余り目立たない，横長のシールとなっている。

第4図 南アフリカ共和国ワインの原産地保証シール
(ただし、左2点が1991年以前、右が現在のシール)

5. ワイン産業の現況

1) ブドウ栽培

南アフリカ共和国の1992年のブドウ畑面積は約10.3万haであり、栽培ブドウ樹本数は約3.2億本を数える。同年のブドウ生産量は約110万トンであり、そのうちワイン用が51%とほぼ半分を占める。ブドウ生産額は、7.5億兰特、日本円でいえば約200億円産業であり、南アフリカ共和国の農業総生産額の約3.3%を占める。南アフリカ共和国は、南半球に位置するため、ブドウの収穫そして新酒の仕込み時期は、2月から3月にかけてである。このため、ブドウ栽培の季節カレンダーは、3月に始まり2月に終わるのが実感らしい。

栽培ブドウ品種のうち、ほぼ3分の1を占めるのが白ワイン品種のシュナン・ブランである(第4表)。これから造られるワインは、超辛口ワインから甘口ワインのほか、シェリー、ポートなど酒精強化ワイン、スパークリングワイン、ブランデー用ワインまで多様である。南アフリカ共和国では、この品種を主にブレンドしたワインは「スティーン」と呼ばれる。他の白ワイン品種では、シェリーまたはブランデー用のパロミノ(地方名ホワイト・フレンチ)、元来はブランデー用であったコロナード、多様な用途をもつマスカット・オブ・アレキサンドリア(地方名ヘイネブート)などが多い。

一方、赤ワイン品種としては、主にブレンド用ワインとして使われるサンソーが最も多く、次いで、カベルネ・ソーヴィニヨン、サンソーとピノ・ノワールを

交配させた南アフリカ共和国の開発種であるピノタージュなどが多い。

2) ワイン生産

南アフリカ共和国において、ワイン生産に関わるのは、①ブドウ農園(約5,000、KWVなどへ果汁を販売)、②エステートと呼ばれる著名ワイナリー(79社)、③エステート以外の個人ワイナリー(71社)、④KWV、⑤KWV以外の協同組合組織ワイン生産者(70事業所、原則としてKWVや卸売業者にワインを販売)、⑥製造部門をもつ一部のワイン卸売業者(Producing Wholesalers、ワインを買い集め、熟成、ブレンド、製品化して販売)である。

このうち、歴史的にみて、ワインの生産・流通に最も重要な役割を果たしてきたのは、KWVである。KWVは、各ワイナリーの生産量を定める「割り当て方式(Quota System)」などによって、ブドウの用途別割当量、ワイナリー別生産量、ブドウおよびワインの価格を決定し、ブドウ生産者、ワイナリー、卸売業者、小売業者、輸出業者など、ケープワイン関係業者を総括的に管理する一種の国立協同組合である。永年にわたるこうしたワイナリー生産量の割り当てとワイン最低価格の保障は、皮肉なことに、ブドウ増産に対する財政的援助制度の廃止、新規ワイン生産者の不参入、ワイン生産者の増産意欲の減退をもたらした。このため、1992年になり、KWVは「割り当て方式」を中止した。

KWVの組織は、約5,000のワイン生産者から選挙で選ばれた役員によって運営されている。KWVの本

第3表 南アフリカ共和国のワイン産業関連史年表

年次	ワ イ ン 産 業 関 係 事 項
1652	リーベックを隊長とするオランダ東インド会社の船がケープに上陸。
1659	リーベックによるケープでの最初のワイン醸造。
1679	第2代総督、ヴァン・デア・スティールがストレンボシュ入植地建設。
1688	最初のユグノー教徒 200 名移住。
1699	ヴァン・デア・スティールが息子（ウィレム・アドリアーン）にコンスタンシアのエステートを譲渡。 ケープからの良質ワイン輸出の最初の記録。
1708	ウィレム・アドリアーン、オランダへ帰還。
1761	良質コンスタンシア・ワイン（白・赤）輸出の最初の記録。
1778	この頃より、コンスタンシア・ワインがヨーロッパで評判。
1795	オランダに替わり、イギリスがケープ植民地を支配。
1811	イギリスによる輸出ワインの品質統制。
1825	イギリス政府による輸入仏ワインの関税引上げにより、ケープワインがイギリス国内で急速に拡大。
1860	フランスでフィロキセラの最初の被害。
1861	イギリス政府による輸入仏ワインの関税引下げによって、ケープワインが打撃。
1885	ケープのブドウ畑にフィロキセラ禍。
1863	バスツールによるフランスワインの疾病調査（火入れ効果の発見）。
1906	最初の南アフリカワイン協同組合の結成。
1909	生産過剰によるワイン価格の底値を記録。
1918	「南アフリカワイン醸造業者協同連盟（KWV）」の結成。
1924	KWV が蒸留用ワインの最低価格を決定する権限を獲得。
1925	ペロルド教授によるピノタージュ（Pinotage）種の交配成功。
1935	「Stellenbosch Farmer's Winery」社設立。
1940	KWV が良質ワインの最低価格を決定する権限を獲得。
1945	「Distillers Corporation」社設立。
1950	「Gilbeys (SA)」社設立。
1955	ストレンボシュ郊外に「ブドウ栽培研究所（Oenological and Viticulutural Research Institute）」設立。
1965	「Stellenbosch Farmer's Winery」社、「Monis of Paarl」社、「Nederburg」社の合併。
1973	「原産地呼称制度（the Wine of Origin Legislation）」制定。
1975	「Nederburg」社で最初のケープワインオークション。
1979	「Cape Wine and Distillers」社設立。
1983	モートン委員会がワイン産業の寡占体制解体を勧告するが、政府はこれを拒否。
1985	「酒類修正法（Liquor Amendment Act）」により、酒類小売店、レストランの営業時間の大幅緩和。
1991	「Douglas Green」社と「Union Wine」社が合併し、「Douglas Green Belingham」社設立。
1992	KWV が「割り当て方式（Quota System）」を中止。

（資料：Huges *et al.* (1992)）

部および主要工場は、パール市に位置しており、総敷地は約 22ha で、年間約 2 万人の訪問者がある（第 2 図、写真 1・2・3）。その他、KWV は、44 ha の直営ブドウ畑を有するラボリエ・エステート、6 つの蒸留所、ワインセラーなどをもち、その総資産は、11.5 億ラント（約 35 億円）余りである。1992 年のデータによれば、そのブドウ取扱量は、全国収穫量 110 万 t の約 85% を占め、そのうち、25% がワイン、残りの 75% がジュース、蒸留用ワイン、工業用アルコール用となる。そして、国内のビールを除く酒類の約 8 割は、KWV の統制下にある。

一方、南アフリカ共和国の良質ワインの代表格はエ

写真 1 KWV 本部のあるパール盆地
（岩山に囲まれ、盆地内の多くはブドウ畑）

ステートワインであり、エステートワインを生産するワイナリーがエステートである。エステートの称号は、フランスのシャトーと同様に、所有ブドウ園で採れたブドウを使って自らワインを醸造する地主生産者のみが表示できる。エステートの概念は、ブドウ生産とワイン醸造の一体性を規定するものであり、その後のワイン貯蔵や製品のボトル詰め工程などとは関係がない。実際、多くのエステートワインでは、エステートによる生産ワインがバルクのまま有力ワイン製造卸売業者やボトル詰め会社に渡され、彼らによって製品化されるのである。写真4, 5は、筆者が訪問した、オランダ風の瀟洒な雰囲気がすばらしい、ストレンボシュ近

郊のボッシェンダール (Boschendal)・エステートである。このエステートは、その創設が1685年と古く、直営ブドウ園面積390ha、ワイン生産量23万ケース(ボトル12本入り)を誇る規模の大きなエステートの一つである。

3) ワイン流通

今日の南アフリカ共和国のワイン流通業の最大の特徴は、ワイン生産とその製品の卸売流通段階における支配的な組織・企業群の存在、すなわち著しい寡占体制が確立している点である(第5図)。すなわち、8,000以上の銘柄ワインの流通は、わずか4つの企業グループによってほぼ独占されている。

その最大企業が「Stellenbosch Farmers' Winery」社である。国内小売テーブルワインに対する同社の卸売シェアは、最近までほぼ7割であったが、現在では、

写真2 KVV 本部
(工場を含め、建物はクリーム色で統一)

写真3 KVV 本部工場
(酒精強化ワイン用の下広がり樽)

写真4 ボッシェンダール・エステート遠景
(芝生と岩山に白い建物が映えて美しい)

写真5 ボッシェンダール・エステートのゲストハウス
(入口に昔のブドウ压榨機が飾られている)

第5図 ワイン産業を支配する4企業グループ (資料: Hughes *et al.* (1992))

他の酒類に重点を移したため、ワインシェアは4割ほどに落ち込んでいる。同グループ関連企業の中では、日本の店頭で最もよく見かける南アフリカ共和国のワイン「Nederburg」を製造・販売する「Nederburg」社は特筆される。

第2の巨大企業は、「Distillers Corporation」社である。同企業グループでは、ワイン買取り会社として、「Die Bergkelder」社と「Oude Meester Group」社が重要である。とりわけ前者は、南アフリカ共和国の多くのエステートワインの貯蔵・熟成・ボトル詰めな

第4表 南アフリカ共和国のワイン用ブドウの品種別栽培割合

品 種 名	栽培割合	収 穫 時 期
白ワイン用品種		
Chenin Blanc (Steen)	31.9%	Early mid-season
Palomino (White French)	9.7	Early mid-season
Colombard	6.2	Late mid-season
Muscat D' Alexandrie (Hanepoot)	5.7	Late mid-season
Clairette Blanche	3.8	Late season
Cape Riesling	3.8	Mid-season
Sauvignon Blanc	3.6	Early mid-season
Semillon (Green Grape)	1.5	Early mid-season
Chardonnay	1.5	Early mid-season
Weisser Riesling (Rhine Riesling)	0.1	Early mid-season
Kerner	0.1	very early
赤ワイン用品種		
Cinsaut	7.0	Early mid-season
Cabernet Sauvignon	2.6	Midto late-season
Pionotage	2.0	Early
Merlot Noir	0.9	Mid-season
Shiraz (Syrah)	0.9	Mid-season
Pinot Noir	0.4	Early mid-season
Cabernet Franc	0.2	Late

ただし、栽培割合0.1%以上の品種を示す。資料：Huges *et al.* (1992)。

ど製造工程まで行う、フランスのネゴシアン (Négociant) に相当する企業であり、多くのワイン銘柄を輩出している。

上記2グループに対して、「Gilbey Distillers and Vinters」社は、イギリスに本社のある「International Distillers and Vintners」社が51%の株式をっており、取扱商品では、ジン、ウォッカ、ウィスキーなど輸入酒が中心である。

1991年、ワイン商社「Douglas Green」社とワインメーカー「Union Wine」社の合併による「Douglas Green Belingham (DGB)」社の創立は、近年におけるワイン流通の最大事件である(第3表)。DGB社は、スーパーやレストランへの販売が多く、同グループによる国内酒類流通シェアは約1割程度である。

一方、近年におけるワイン流通の特色として、上記の全国的なワイン生産・流通会社のチャンネルを通さない取引流通の増加は注目される。その一つは、エステートや地方ワイナリーなどのワイン生産者による直売傾向であり、ダイレクトメールなどを通じて顧客や小売店へ直接販売および輸出がなされるようになった。もう一つは、オークションによる販売の増加であり、特に「Stephan Welz & Company」社および「Ned-

erburg」社によるオークションは有名である。とりわけ後者は、約1万ケースの出品、売上げ200万ラントにおよぶケープワイン業界最大のイベントにもなっている。

1993年の南アフリカ共和国のワイン流通をみると、販売量の92.3%が国内向けであり、残りの7.7%が輸出割合である。輸出先は、イギリスが半分近くを占め、以下ドイツ、オランダなどヨーロッパ諸国が多く、日本がほとんどを占めると判断される「極東」への輸出先割合は約6%程度である。これら輸出ワインの7割は、KWVワインが占める。

6. ワイン産業の展望

以上みてきたように、南アフリカ共和国のケープワイン産地は、蒸留用ワインや安価な低級ワインが多い、いわば後進産地である。従来、ワイン産業は、KWVによる最低価格の保障や政府による輸出奨励金制度など、かなり手厚い保護を受けてきたが、近年、ワインの生産、流通、消費をめぐる国内および世界の情勢は大きく変化している。

その第一は、国内および世界におけるワイン消費量の減少である。いま、1975、83、91年の南アフリカ共和国国民一人当りのワイン消費量をみると、10.4ℓ、

9.6ℓ, 9.0ℓと推移している。フランス、イタリア、アルゼンチンなどさらにワインを多飲する国では、この傾向は一層顕著であり、世界的にみてワイン需要は大きく減退傾向にある。

第二は、政治的な影響であり、マンデラ氏が率いる新政府は、安い黒人季節労働者に依存する「白人産業」としてのワイン産業に対して、少なくとも温情的な政策はとらないことが予想される。事実、GATTでも問題となりつつある輸出奨励金制度の見直しや酒税値上げの動きもでてきている。

第三は、これが最も重要であるが、ワインやマスト（濃縮ブドウジュース）の世界的な過剰生産、それに伴う市場価格の急落、国際間競争の激化などワイン世界市場の動向である。1993年にバルクワインやマストの国際価格は急落し、同年中頃の調査によれば、買い手の見つからないワインおよび同量のブドウ濃縮ジュース4,500～5,000万ℓが、南アフリカ共和国国内に貯蔵されている。一方、バルクワインやマストの価格急落は、日本における輸入増加をもたらし、国内メーカーによる格安ボトルワインの販売競争に至った点は記憶に新しいところである。1994年における日本のバルクワイン（150ℓ以上容器入り）輸入相手先実

績をみると、南アフリカ共和国は、ブルガリア、アルゼンチン、チリに次いで第4位であり、輸入量は前年比263%と急増したのに対し、単価は前年比77.3%と急落しており、さらに安価なワインが輸入されたことがわかる。

おそらく、ケープワイン産地およびワイン産業の未来は決して明るいものではないだろう。今後の産地および産業の振興のためには、量より質を重視して良質ワイン比率を高め、産地のイメージアップをはかり、単価を高めるほかはないであろう。バルクワインの輸出は、需要開拓の一時的解決策にはなるが、長期的には、ケープワインの低級イメージを強化することになり、またバルクワインは、買入れ者ブランドワインに化けることにより、結局他のワイン需要を逼迫させることに直結するからである。南アフリカ共和国のケープワイン産地の場合、これまではあまり知名度がなかっただけに、新政権誕生の世界的歓迎ムードを利用しつつ、宣伝、販路拡大に努めるとともに、産地および産業を統括しているKWVが中心となり、ワインの品質規制を高める舵取りができるかどうか、今後の産地の浮沈の鍵を大きく握っているといえよう。

＜愛媛大学＞（つづく）